



Title	装飾的な紐結びにみる「日本らしさ」の源泉：結びと紐に内在する意味の考察
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	間谷論集. 2024, 18, p. 39-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

装飾的な紐結びにみる「日本らしさ」の源泉

——結びと紐に内在する意味の考察——

矢島 由佳

〈キーワード〉「日本らしさ」 結び 組紐

1. はじめに

人間の技芸の一つである結ぶという行為は、日本に限らず世界中で見られ、時に色や素材に工夫を凝らして、日にちやお金を数える等多様な目的で結びは使われてきた。しかしながら、技術発展に伴い、それらは時計やカレンダー、計算機等に置き換わり、結びが用いられる機会は少なくなったと考えられる。その一方、日本では、風呂敷、祝儀袋、着物の帯、注連縄、着物、神社仏閣、御神輿、香道、茶道、骨壺の収納袋等に見られる装飾を目的とした紐結びが21世紀の現在も人々の生活に根付いている。結びが装飾として用いられてきた記録として、茶道や香道に関したものが注目されやすく、それ以外の記録については従来の結びに関する研究には十分に考察されてこな

かった。そこで、陶磁器や着物の図案帳からも紐結びが装飾に用いられてきたことを実際に見ておきたい。当該史料の多くは、江戸時代以降にみられ、鍋島焼にみる結文様や組紐文様（図1）、（図2）のほか、伊万里焼にも瓶の胴部や首部に紐が巻かれた装飾や結んだ文様がみられる（図3）。さらに、野々村仁清が好んだ結文文様は、根津美術館の「結文



図1：「色絵組紐文皿」
(1690-1720年代)

図茶碗」や大阪市立東洋陶磁美術館の「色絵結文香」(図4)にみることができる。これらの結文文様は、吉祥を想起させる文様であったと想像されるが、結びや組紐文様が多くみられる鍋島焼に関して言えば、その特徴は、その生産目的に見られ、鍋島家が徳川將軍家に献上するために生産した磁器であることが挙げられる¹。鍋島焼には牡丹唐草文や七宝結び等の裏文様があり、將軍家とその他大名への贈答品等に用いられた鍋島焼を区別するために裏文様が用いられた可能性を指摘できる²。

他方、結び文様は、国立歴史民俗博物館所蔵の江戸後期の婚礼衣装と考えられる「御簾檜扇模様振袖」にみる様に、着物の文様にも用いられてきた³。ただし、紐結びを意匠化した文様がみられる着物で、年紀が判明した史料は管見の限り見当たらない。一方、紐結びを意匠化した着物图案等が見らる出版物で年紀がわかるものもある。とりわけ興味深いのは、著名な浮世絵師である葛飾北斎が生涯で一冊のみ著した小紋の图案帳『新形小紋帳』(文政7:1824)に紐結びを元に考案したと思われる文様がみられることである⁴。そこには、16種類の柄が著されており、それぞれの文様の横に簡易な説明が付されている。それらの説明の中でも目を引くのは、「ワちがひくミ」という説明が繰り返しなされていることである。いずれの图案も線で描かれた輪が交差した文様であり、「五ツかりがね」を除く全ての文様は左右対象の幾何学文様となっている。この様に、交差す



図2:「染付組紐文三つ亀甲形向付」(1660-1690年代)



図3:「色絵葡萄栗鼠文瓢形水注」(17世紀)

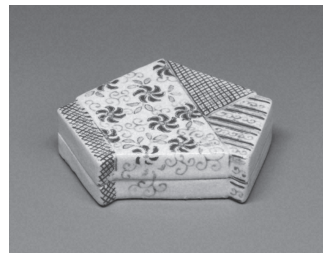


図4:「野々村仁清「色絵結文香合」(17世紀)

る輪が多用されていること、そして「組む」という語が用いられていることから、上述の16種類の文様は、紐を「組む」、あるいは「結ぶ」ことでできる意匠、つまり紐結びに着想を得て考案された可能性が高い文様であると思われる。『新形小紋帳』は明治時代以後も再販され、同書に描かれた文様は「北斎模様」と称され、着物の図案

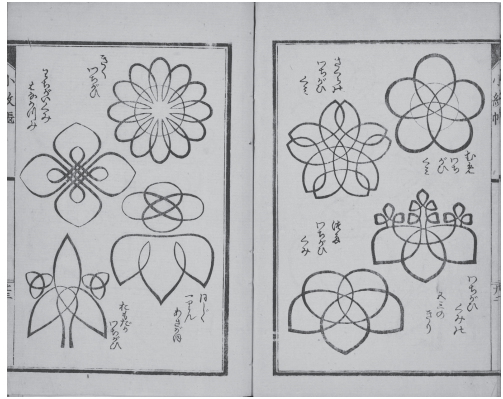


図5：葛飾北斎『新形小紋帳』（1824）

に活用されてきた。また、結びに着想を得た着物の図案史料は、北斎以後にも見られ、神坂雪佳に師事し、京都を拠点に活躍した着物の図案家である河原崎晃洞（1899-1973）によるものがある。木版画の美しい図案帳としてまとめられた『むすび模様』（1933）や『むすび雛形』（1941）に紐結びで構成される多様な結び文様が見られ、着物の図案として用いられていたと思われる⁵。この様に、江戸時代以降、茶道や香道以外においても、紐結びが人々の生活を彩ってきた。

日本の結び研究の第一人者である額田巖（1911-1993）は、日本を「結びの花咲く国」と称し、その背景には装飾結びの美しさが、礼法、茶道、香道等の日本文化と相互補完して、高い芸術作品と評される域まで発展を遂げた側面があると説明する⁶。使われているモノには文化が反映されるという視点で見れば、日本文化における結びの文化的価値を看過できないと思われる。しかしながら、その研究状況に注目すると、主に数学者や民俗学者を中心にその研究に取り組む学者はいたものの、日本文化の研究として、美術史、文化史等の分野で研究対象に十分に含まれてこなかったといえる。なぜ結びに関する研究は活況を呈してこなかったのでしょうか。その理由を考えると、第一に、結びは生活文化の一部として取り込まれ、当たり前モノとして看過されてきたことや、所謂「伝統文化」として広く認識されている茶道や香道においても、装飾等の目的で結びが用いられてきたことは、史料から窺えるが、いずれの芸道においても結びそのもの

が点前の中心になることはなく、結びの研究に価値を見出してこなかったことにその理由をみることができる。第二に、金属、陶磁器、木材等の素材と異なり、結びに用いる紐が繊維であることから、その脆弱性ゆえに史料として残りにくいことに加えて、結ぶということは解くことと隣り合わせであり、結ばれた完成形状で残りにくいことから研究対象になりにくかったと考えられる。

その一方で、結びや紐結びに用いる組紐は、日本の伝統や日本的なイメージの一つとして外交等に取り込まれてきた側面もある。例えば、紐結びが軍国主義の元で国粋主義のシンボルとして用いられた第二次近衛内閣下の1940年に制定された国民服儀礼章（図6）はその一例と考えられる。国民服儀礼章とは、軍国主義の元で国民を第二次世界大戦中に動員していく際に、中国および東アジア侵略を正当化する「八紘一宇」という思想を表象したものとして1940年11月1日に国民服令により制定された国民服を冠婚葬祭の際に礼服として使用する際に、厳粛、経験、鄭重の意を表すために佩用した古代紫色の飾紐である（図6）⁷。さらに、ジョセフ・ナイがいうところのソフト・パワーとしての一例として、日本のイメージ向上を目指し、2017年にサンパ

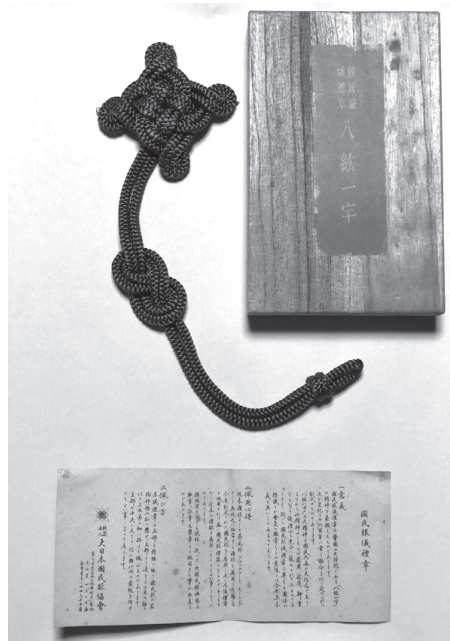


図6：国民服儀礼章

ウロ、ロンドン、ロサンゼルス の3都市に外務省所轄のジャパンハウスが開設されたことが挙げられる。これら3拠点で、1652年創業の組紐の老舗である株式会社道明は、2021年から2023年にかけて「KUMIHIMO : The art of Japanese Silk Braiding by DOMYO」と題した巡回展を実施し、日本の組紐の歴史的発展等を国外に発信した⁸。しかしながら、なぜ結びや組紐が日本の伝統や日本的なイメー

ジとして機能し得るのかについては、従来の研究では明らかにされてこなかった。したがって、本研究は、結びと組紐に関するイメージがどのようにこれまで論じられ、ソフトパワーの源泉としてのその言説の起源がどこにあるのかを明らかにすることを目指す。その過程で、私たちが認識する伝統や日本文化について考える契機を提示し得る点に研究の意義があると思われる。考察では、結びを分析対象物および行為主体者（Agency）と捉えて考察するほか、結びを構成する素材に起因する価値についても考える。このような研究態度は、1980年代以降に見られたそれ以前のテキスト偏重の文化研究への批判に応答した形で関心が高まったマテリアリティ（Materiality）に焦点を当てた物質文化研究（Material Cultural Studies）による⁹。なお、マテリアリティという語には多様な解釈があるが、本稿は素材性を意味する語として用いる¹⁰。本稿の構成は、結びに内在する意味および紐に内在する意味について考察し、結びや紐がなぜ日本らしさを表象することに帰結するのかの一端を明らかにすることを試みた後、全体をまとめるものである。

2. 結びに内在する意味

日本の結びについてこれまでどのような論考が発表されてきたのであろうか。その詳細を見ていく前に、まず結び研究がどのように発展したかについて概観しておく。日本の結びについての文化史研究の礎を築いたのは、額田巖（1911-1993）および藤原覚一（1895- 没年未詳）である。両名は、一連の研究を通じて、膨大な数の結び方を分類し、包括的な結びの歴史観を提示した。その研究に関連する書籍刊行年に注目すると、1970年代から1980年代にかけて多く出版されており、その時期に結びに関する研究が活況であったことが窺える。額田の研究成果は、人類学および数学にも言及の上、結び方およびその文化史を民俗学として体系的に記述している一方、藤原は結び技法により力点をおいた解説をすることにその特徴がある¹¹。両名による結びに関する書籍の刊行が多く見られた時期は、数学分野における「結び目理論」研究の興隆期と重なり、結びへの学問的関心が分野を超えて共有されていた可能性が高かったと思われる。この結び目理論は、紐の結び目や絡み目を数学的に表現し、研究する学問で、位相幾何学（トポロジー）

の一種であり、生物学、化学、物理学等多くの分野とも関連し¹²、応用研究として分子レベルで結び目を生成することや、結び目を解くことを阻止する様な新しい抗生物質や抗がん剤をその研究対象としてきた¹³。結び目理論研究が本格化したのは、20世紀終わり頃だと考えられ¹⁴、1980年代頃から結び目理論が大きく進展し、国内外で活発に研究される様になり、関連書籍の英語文献の邦訳も多数出版されている¹⁵。他方、人文学における結び研究は、1980年代から起算して今日まで約40年間の研究の空白期間があり、海外の人類学にみる結び研究の邦訳はほとんど見られず、研究内容の更新余地があると指摘できる。

以上を踏まえて、結びにみる「日本らしさ」の表象の起源はどこにあるのかという本研究の視座を考慮すると、結びの機能面ではなく精神面が重要といえる。これまで、結びに内在する精神的な意味についての研究は、民俗学者や神道学者によってなされてきたが、その中で、後の研究者にも多くの影響を与えたのは、折口信夫(1887-1953)による鎮魂論に関する研究だと思われる¹⁶。折口は、「発生」という視座をもって文化の継承について研究を行なった人物で、鎮魂論と表裏一体となる「むすび」論についても考えを発表していたことで知られる¹⁷。そこで以下では、折口の鎮魂論に詳しい宗教学者の津城寛文に依拠して折口の鎮魂論およびその受容の内実について見ていきたい。津城は、折口の説く鎮魂は、現在我々が「鎮魂」という言葉から想像する魂を鎮めるという葬送慰霊的な意味と同義ではないと断った上で、「他界と現界の間を行き来自在な『靈魂』である『外来魂』を増殖させたり(たま植ゆ)、現界の物体に憑依させたり(たま触り)、運動を制して一箇所に固定させたり(たま鎮め)、結び留めたり(たま結び)する一連の操作過程を「鎮魂」という。これは職能者が携わる呪術・技術であり、芸能や儀礼の中核をなす。(中略)しかし実際に鎮魂を成就するのは人間の業ではなく、「ムスビの神」の業である」と説明する¹⁸。つまり、折口の考える「結び留める」という行為は、鎮魂を成就させるための呪術・技術の一部であるという見解が示されている。他方、結びの意味は、産霊の意味と併せて考察することが重要となることがわかる。折口は産霊について「人間の身体 of 旧くなった靈魂を取り出して、新しい靈魂を容れる方法が産霊といふことになる」と説明している。また、鎮魂と産霊の関係についても考察を行い、両者の区別を次の様に指摘

している。

形骸に靈魂を結合させると、形骸は肉體として活力を持つやうになり、靈魂はその中で、育つのである。さうして其靈魂は、肉體を發育させる一さう言う風な信仰が、更に^{たまふり}鎮魂の技術を發達させることになったのである。だから、^{むすび}産靈は信仰で、鎮魂は咒術といふことになる¹⁹。

つまり、呪術的技術である鎮魂は、産靈という信仰から發達したものであると、折口が捉えていたという見解を津城は示している。次に折口の鎮魂論に影響を受けた論者を見ていきたい。まず、折口に直接師事した国文学者であり民俗学者である高崎正秀は、『古典と民俗学（上）』（1978）に収まる「千人針考」の項にて、千人針が一種の結びの形式に沿ったもので、鎮魂のための儀式に用いられた魂の緒信仰の伝統に起因すると説明する²⁰。ここでの「魂の緒信仰」とは、古人が自らの魂を^{たまくしげ}玉櫛笥や玉手箱に封じたものを^{たまどこ}魂床に安置した後に神聖な紐で結ぶという信仰を意味したものである²¹。高崎の他にも千人針についての研究は民俗学の研究者を中心になされてきたが、当該研究が多くみられるようになったのは、千人針が全国的に広まった後の昭和12（1937）年以降であった²²。事実、加藤良治が「奇なる呪物＜千人針＞」（1997）で玉結びについて「出征兵士が戦地で自らのタマシイが抜け落ちないように、身体にタマシイをしっかりとつないでおく。つまり死から守るために、この縫い玉（結び）が“呪力”の役割を果たす」と述べる様に²³、折口の結びの解釈は現代にも受け継がれているいえよう。

高崎のほか、前述の額田も折口の鎮魂論をもとに結びを理解し、その論考を『結び』（1972）、『結びの文化：日本人の知恵と心』（1983）、『ひも』（1986）にて発表している。額田は、産靈の理解が日本文化の理解には不可欠であると述べ、大倉精神文化研究所の原正夫による造神三神が一組になって働くという「三柱一体説」のほか、國學院大学教授の樋口清之および武庫川女子大学教授の井上実による産靈の解釈を紹介する²⁴。また、折口のむすび論の要約と解説に紙面を割き、折口説を「生命の起こってくる作用が産靈であり、神の力である」とまとめている²⁵。さらに神道との関連で、鎮魂祭の儀式において、糸を結び、魂が抜け出す

のを結び留める呪術があることや、昔の人はくしゃみをするとき体から魂が抜け出すと信じ、それを防ぐための「鼻結びの糸」を用いた靈魂を結び留める風習があったことについても説明している²⁶。

以上の高崎および額田にみる様に、折口の鎮魂論は、千人針に見られる結びや結び文化全般を論じる際に重用されてきたといえ、結びを日本文化として表象する所以を考察するにあたり有効であると思われる。したがって、以下では折口の鎮魂論の起源について考察を行ないたい。

鎮魂論の起源はどこにあるのであろうか。鎮魂論の起源は、宮中祭祀にみる鎮魂祭にみることができる。前述の津城も宮中鎮魂祭について言及し、儀式を概説しているが、儀式で用いられる糸や結びの詳細について十分に記していないため、ここでは、宮中祭祀をつかさどった花山天皇の子孫である、神祇伯を世襲した白川家によって受け継がれた伯家神道の近世鎮魂祭において紐結びを用いた記録からその内実を見ていきたい。宮中鎮魂祭は、従来天皇の健康長寿祈願を目的としたものであったが、時代が下ると、身分の高い個人の健康長寿祈願を目的とする鎮魂祭も執り行われた²⁷。天皇および個人に対する鎮魂祭の両方において、糸が用いられ、糸を結び留めるという儀式が見られた様子が記されている。前者については、神祇伯白川家の管掌した神事を部類分けして記した書である『伯家部類』に収まる「鎮魂祭之事」の項の鎮魂祭次第にて、赤2本、黒1本、白4本、青3本の計10本の4色からなる糸が用いて魂を留め、精気を結び留め、元気を養うための儀式が行われたことが記されている²⁸。他方、個人に対する鎮魂祭で五色の糸が用いられていたことは『鎮魂祭次第』に次の様に記されている。

葛筥ニ五色ノ糸ヲ盛り居 赤二筋・黒一筋・白四筋・青三筋ヲ黄一筋ニテ巻
キ束子置、布留部祝詞百反ノ十切りニテ、一筋ツヽ結フナリ、是ヲ魂緒結ト
云フ、鎮魂祭第一ノ作法ナリ²⁹

その大意は、長寿と幸福を祈祷する際に、葛筥に五色の糸を盛り、布留部祝詞をあげる中、反ノ十切りになれば、赤2筋、黒1筋、白4筋、青3筋の糸を黄1筋の糸に巻きつけて束ねたのち、一筋ずつ結ぶこと、これを魂緒結といい、鎮魂

祭第一の作法であるということになる。これらのことから、個人に対して行われた鎮魂祭の儀式も天皇に対して行われた儀式に類似する形式で糸と結びを用いて健康長寿の祈祷が行われていたことがわかる。紐には人々に精気を与えるという肯定的な意味が神道に由来する儀式により与えたと、折口が鎮魂論として論考を示し、その影響を受けた高崎や額田等によって鎮魂論の解釈が繰り返し語られるなか、その言説が定説化していったと解釈し得る。なお、「五色の糸」に関して、平安時代に著された『往生要集』や『今昔物語集』等の記載内容から、瀕死の往生者と阿弥陀仏を青、黄、赤、白、黒からなる五色の糸で結んで極楽往生を願う臨終行儀を想起する場合もあると考えられる³⁰。しかしながら、その様な使用法は仏教儀礼の通則であると思われる。事実、阿弥陀仏信仰の原典である『仏説阿弥陀経』には極楽浄土に七種の宝池があり、全ての池より生じる蓮華の色については「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という4色のみ記されている³¹。また、『伯家部類』が編纂されたのは江戸時代であり、鎌倉時代の伊勢度会神道において萌芽した神仏隔離の傾向は、室町時代の吉田神道に受け継がれた後、江戸時代にも受け継がれ、『伯家部類』においても神仏は区別されていたことから、仏主神従説よりは神主仏従的傾向が見られると思われるが、この神仏隔離意識は、神事場において発現するもので、日常の仏教信仰の排斥を意図するものではなかったと考えられている³²。したがって、鎮魂の儀が神事であるため、そこに神仏習合の影響は見られなかったと思われる。

以上のことから、民俗学者は、結びに内在する精神的な意味を理解するために、産霊についての考察を主に行い、その解釈に多少の違いはあるものの、神道の鎮魂祭にみる儀式を根拠に結びと魂を結びつけて理解し、千人針の考察の様に、鎮魂祭とはかけ離れた内容を考察する際にも鎮魂論に端を発する、結びと魂を結びつけた解釈が援用されてきたことが示されたと考える。

3. 「紐」に内在する意味

これまで、結びに内在する精神的な意味について民俗学者によってなされてきた言説を見てきたが、「日本らしさ」の源泉につながる紐に内在する精神的な意味についてどの様に論じられてきたのであろうか。以下では、先行研究を概観し

た上で、書物としての記録史料に加えて、史実としての史料も援用し、紐にみる「日本らしさ」の表象の源泉について論じたい。

装飾を目的とした紐結びに用いる組紐について最初に体系的な論考を示したのは、株式会社道明の7代目道明新兵衛(1904-1972)であり、紐の歴史の体系化や、正倉院に保存されていた組紐の断片から組紐の再現を行なった功績が高く、その論考は、道明新兵衛『ひも』(1963)にまとまっている。同書には法隆寺や正倉院に伝来する紐は、唐からの渡来品であり、奈良時代に組紐製作に唐の技術が導入され、平安時代に国風化してから組紐の色彩や図柄に変化が生じたと記されている。つまり、組紐は日本で発展した工芸品ではないというのである。一方、紐に内在する精神的意味に関する記述は、7代目道明新兵衛と親交があった額田による紐の通史的な文化史『ひも』(1986)に次の様に記されている³³。

『万葉集』には「ひも」を枕詞とした例が数十あるが、これらはつなぐ・縛るなど、ひも本来の機能をこえて、「物事の長く続くこと」や「人の魂をつなぐもの」など精神の世界にまで昇華して使われている。(中略)生まれたときの産衣から、あの世の旅立ちの死装束まで、すべての衣服はひもで結ぶようになっている。(中略)日本人は、ひものことを緒ともいって、生まれた赤子のエナを「へその緒」といい、人の息絶えることを「魂の緒が切れる」という。ともに命の緒のことで、結びの信仰や呪術にかかわる言葉である。このように、ひもや緒は、「用」だけでなく、「美」も「神秘」も、一筋に撚りあわせて、その伝統を今日に伝えているのである³⁴。

つまり、額田は、紐や緒には、美的価値のみならず、先述の折口の鎮魂論にみる魂と結びの関係性に起因する呪術的価値が包含され、そこに日本的な紐の価値を見出していると捉えることができる。しかしながら、万葉集に収まる歌が詠まれた奈良時代には、先述の様に仏教の伝来とともに唐から渡来した紐が用いられていたことが正倉院等に伝わっている点において、紐を日本文化と容易に結びつけることはできないと指摘できる。紐と日本文化を結びつける姿勢は、組紐研究家の木下雅子や多田牧子によりなされた、組紐の技法や他国にみる組紐との比較

研究の成果物にもみられる³⁵。木下は、『日本組紐古技法の研究』(1994)で「法隆寺や正倉院に現存する古い史料としての組紐の全てが国産されたものではない」と述べた上で、優れた日本の組紐技術の解明と復元を試みた内容を記している³⁶。他方、多田は「歴史解説『日本は組紐の文化』(2020)」と題した文章で、現存の法隆寺宝物である組紐に言及し、日本に組紐がもたらされたのは、仏教の伝来とともにもたらされたと思われると述べる³⁷。ここで指摘すべきは、組紐が渡来品であったことはいずれの著書の表題に反映されておらず、組紐が日本の文化であることを主張した表題が付けられていることである。では、日本に起源が見られる紐とそこに内在する意味とは如何なるものであろうか。

日本における紐の起源については額田および多田も指摘していることだが、その起源は古く、紐の原形と考えられる出土品が縄文時代の遺跡から見つかった³⁸。周知の様に縄文土器には縄目文様が見られ、縄が人々の生活に用いられてきたが、紐に関する出土品も遺跡から発見されてきた。青森県三内丸山遺跡からは紀元前3900年前と推定される、五つ組の「紐」が見つかった。この五つ組の「紐」は、長さ5センチに満たない小さな断片で、10本の蔓を2本1組で編んだ5本編みの紐である(図7)である³⁹。また、福井県鳥浜貝塚からは、縄文時代前期と推定される長さ約24センチの三本組縄が見つかった⁴⁰。

これらは、自然素材のモノを捻ったり、結んだりすることは、最も古い人間の芸術行為であるということを裏付ける史料といえる⁴¹。この最も古い人間の芸術行為に使われた結びの構成要素である紐には、どのような意味が内在すると考えられ、その言説が築かれてきたのだろうか。縄文時代の紐は植物繊維を撚って作られることを鑑み、物を結ぶ機能性以外の装飾を目的とする紐



図7：「5本組紐」

の原型としての縄を例に紐に内在する言説の起源とそこにみる意味を考察していきたい。縄に関する言説の起源について調べたところ、管見の限り、注連縄に関する記載の文献上の初出は、『古事記』にみることができ、天照大神が岩戸屋から出現した際に、岩戸屋に張り巡らされたのが、尻久米縄しりくめなわであり、今日の注連縄であることが記されている。では、注連縄はどの様に理解されていたのであろうか。日本で最初の図説百科事典『和漢三才図会』(正徳2；1712年成立、刊行年不明)は注連縄について「注連」(図8)として次の様に記している。

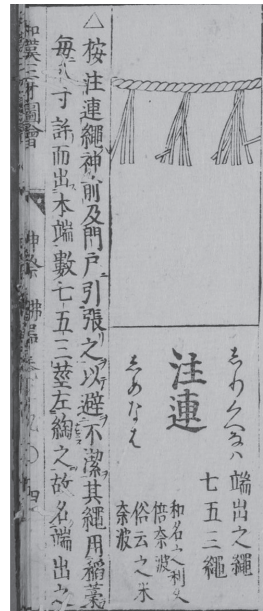


図8：「注連」

按注連縄ハ神前及門戸ニ引_{ナレニス}張リ之ヲ_{ツナク}以テ避ク_{アラコモ}不潔ヲ_{ツナク}其縄用_{アラコモ}稲藁ヲ_{ツナク}毎ニ八寸許リ而出ス_{ツナク}本端_{ツナク}數七五三莖左_{ツナク}綯_{ツナク}之ヲ_{ツナク}故名ク_{ツナク}端出之縄ト_{ツナク}凡米穀ハ繫_{ツナク}生命ヲ_{ツナク}至寶無_{ツナク}衆草加ル_{ツナク}之ニ者_{ツナク}神明賞_{ツナク}美シ之ヲ_{ツナク}洗米散米新薦注連縄等最モ所_{ツナク}重シスル也⁴²

その意味は、「思うに注連縄は神前や門戸に引き張り、これによって不潔を避ける。その縄は 稲藁を用い、つねにその本端を八寸ばかり出してたらず。その数は、七・五・三である。莖を左になわなう。それで端出の縄という。そもそも米穀は生命を繋ぐもので、至宝ともいうべく、衆草のこれに及ぶものはあり得ない。神明はこれを賛美する。洗米、散米、新薦（あらこも）、注連縄など最も重んぜられるものである⁴³」というものである。つまり、不潔を避けるために、空間を隔てる結界として注連縄が用いられたほか、注連縄の材料である稲わらの穂先に実る米に神聖性が内包するため、藁を用いた注連縄にも敬意が払われていた

ことがわかる。江戸時代において他にはどのような言説が見られたのだろうか。江戸時代の識者であり、有職故実家の伊勢貞丈（1718-1784）が著した『貞丈雑記』（天明4；1784頃成立，天保14；1843刊行）には、注連縄について次の様に述べられている。

しめ縄の事、わらにて左縄になうなり。ないながら所々に七五三のわらを下ぐるなり。三筋下げて、間を置きて五筋下げ、又間を置きて七筋下げ、又間を置きて三・五・七、三・五・七とさぐるなり縄の両端をば切りそろう事なし。そのまま置くなり。これ取りつくろわず直なる姿なり。（中略）しめ縄、長さ・ふとさ、七・五・三の間の寸法、下げ所の数等、法式これ無し⁴⁴。

縄を左になうことや下げる藁の数が七五三であることが、先述の『和漢三才図会』にみる注連縄に関する記述との共通点であることがわかるが、『貞丈雑記』には注連縄に用いる素材についての言及は見られないのが特徴である。以上にみる江戸時代の注連縄の解釈は、現代にも受け継がれ、聖なる空間と世俗空間を仕切るために左になわれた注連縄が用いられ、形式によっては、縄の下に七本、五本、三本の藁を垂らした注連縄も見られる。具体的事例として、地鎮祭において注連縄で清める場所を囲い、俗世と隔てた上で降神の儀式を行うことが挙げられる⁴⁵。日本庭園や建築史に詳しいギュンター・ニッチキ（Günter NITSCHKE）は、注連縄は日本で古くから用いられてきた束ねることを表象した一例であり、「しめ」という言葉に「束る」という意が包含され、あるものの占拠を意味すると説く⁴⁶。

ではなぜ藁を縫った縄が境界となるのであろうか。それは、縄が人間の手で作り出されることと関係している。人類学者のティム・インゴルド（Tim INGOLD）は、作られたモノを観察する際、モノを作った人の考えが反映された成果物として捉えるだけでなく、作り手の感覚的な動きや素材との関わりを考慮して作るという行為を考察すべきであると主張する⁴⁷。糸紡ぎ、機織り、レース編み、刺繍の際の手の動きは意識的に行う動きであり、作るという行為を通じて、紡ぎ出す糸に作り手の思考が手の動きを通じて反映されるという⁴⁸。この考

えに依拠すれば、藁を縫った縄は、作った人の作っている際の思考を留めた記憶媒体として捉えることができる。換言すれば、縄を張ることで、縄が張られた場所に、縄を作った人の思考を間接的に投影できると理解できる。縫った縄目を見た人は、縄を作った人の触覚や思考の跡をみるともいえ、そこに縄が境界や結界として機能する理屈があるといえる。さらに、この理屈を特定の形状を表現する行為である結びに当てはめると、紐の結び目を、結び手の思考が込められた跡として解することができるため、結び目には呪術を含む神仏等の信仰に用いられてきたと理解し得る。

一方、縄文時代以降の紐の装飾がみられる史料は、古墳時代以降の服飾の史料になると思われる。古墳時代の遺跡から発掘されてきた人物埴輪の中には、蝶々結びを伴う服装を身に纏ったもの（図9）も多数確認されてきた。布と布を繋ぐという実目的のほか、戦に際して、敵から身を守るための呪いの意味を込めて結びが用いられたとも考えられる。なぜなら、後の時代に見られる甲冑には人型の総角結び用いられ、外部からの侵入を防ぐという意味の元、武人の無事を願ったと伝えられ、武人を守るための呪術的目的のもと、結びが用いられて



図9：埴輪盛装の男子
（古墳時代、6世紀）

きたと考えるためであり、同様の意味を古墳時代の男子の服飾に敷衍してみることができると思われるためである。この総角結びは、装飾結びの代表的な結びの一つであり、信仰の場で用いられてきたことは、仏像や仏具にもみることができる。意匠化された総角結びが見られる最初のものと思われるのは、天平時代に作られたと考えられている東大寺三月堂の月光菩薩の帯飾り（図10）に認められる、と額田は『ひも』（1972）で述べており⁴⁹、その考えを踏襲した論説が茶道月刊誌『なごみ』204号（12）（1996）にみる「特集・日本の『結び』」に確認でき、

月光菩薩に総角結びの最初の例が見られるという以下の説が主な読者である茶道愛好家に流布したと考えられる。

飾り結びで基本的なものは「あげまき結び」「蝶結び」「あわび結び」の3種類です。その中の一つ「あげまき結び」が意匠として取り込まれたものが、天平時代の国宝、月光菩薩立像。この帯飾りに認められる結びの意匠が、現存する最古のものであるといわれています⁵⁰。

結びそのものに着目すると、上述の埴輪にみる男子の盛装と比して、月光菩薩にみる総角結びは、緩やかに布に沿って総角結びが流れる様に衣の上に垂れ下がり、布と布を結びつける実用性を伴った装飾結びではないことがわかる。

以上のことから、組紐に関するこれまでの先行研究において、強調されてきた渡来品としての紐ではなく、「日本らしさ」の表象の源泉として、紐の原型と考えられる縄にどのような精神的な意味を見出すことができるのかを考察した結果、縄が呪術的な意味を表象できるのは、纏った縄目を見た人は、縄を作った人の触覚や思考の跡をみることから、縄が境界や結界として機能する理屈があるということを示したと考える。さらに、代表的な装飾結びである蝶結びおよび総角結びの遺跡にみる起源を考察し、そこにも呪術的意味を見出し得ることを示した。

6. おわりに

本稿は、意匠を凝らした芸術作品としての組紐ではなく、単なる紐を結んだ紐結びという一つの形態美の内実にはどのような意味が込められ、「日本らしさ」を担



図 10：月光菩薩像
(天平時代、8世紀)

えるのか、その源泉はどこにあるのかについて、結ぶという行為およびその素材である組紐に内在する意味を中心に考察した。その結果、第一に、折口信夫の鎮魂論を切り口に、神道において見られる鎮魂祭に起因する結びおよび紐の意味が、神道における鎮魂祭の式次第をもとに魂と紐を結びつけてどの様に理解されてきたのかを示した。そして、折口の鎮魂論が民俗学者によって第二次世界大戦後も受容され続け、鎮魂祭という宮中祭祀とはかけ離れた戦時中に兵士の無事を願うという千人針の解釈にも鎮魂論が援用されていたことが特徴的であることを指摘した。それを換言すれば、世界中どこにでも見られる結びを神道という文脈のもとで解釈することにより、日本文化としての特質が結びに付与されたと解釈し得る。他方、折口が1930年頃には既に鎮魂論に関連した論説を展開していたことを加味すると、1940年に「八紘一宇」という標語のもと、日本による東アジア統一のシンボルに結びを国民服儀礼章に採用された頃には既に、為政者や側近の者で、折口の鎮魂論に通じていた者がいた可能性があったことを指摘できる。つまり、人を結びつけるという意に加えて、神道に起因する日本らしさを表象できる素地が結びにあることを鎮魂論に依拠して説明し得たため、国粋主義の文脈において国民服儀礼章が誕生したと考えることも可能となる。第二に、紐結びに用いる素材としての紐にみる日本らしさについては、組紐は仏教の伝来とともに日本にもたらされた中国由来の工芸品という文脈で理解することができ、日本文化としての特質を見出すことは難しいことを確認した。その上で、岡本太郎『日本の伝統』(1956)に類似した視点であるが⁵¹、日本の伝統や「日本らしさ」の表象の起源として、最も古く遡れるのは、縄文時代の遺跡にみる紐の原型といえる縄であり、縄が呪術的な意味を表象できるのは、纏った縄目を見た人は、縄を作った人の触覚や思考の跡をみるといえ、そこに縄が境界や結界として機能する理屈があるためであるということを示した。さらに、紐を用いた基本的な結びである蝶結びが見られる人物埴輪および総角結びが確認できる月光菩薩を考察し、そこで用いられた結びに呪術や信仰の意味を見出し得ることを指摘した。ただし、その起源を突き詰めれば仏教は外来宗教であることは周知のとおりであり、この様に紐結びに特定の国を結びつけて文化的真正性 (Cultural Authenticity) を見出すことが難しいにも関わらず、紐結びや組紐が日本文化として現在も認識

され続けている側面もあることも示した。また、それらが日本文化として世界に認知される様になった要因について着目すると、物語の中に組紐やむすびへの言及がみられる2016年に国内外で公開された映画『君の名は。』（原作・脚本・監督：新海誠）によるところが大きいと思われる⁵²。そして、このようなソフトパワーの下地があったために、株式会社道明のジャパンハウスでの組紐の展示が可能となり、日本文化として国外にアピールすることが可能となったといえよう。以上のことから、「八紘一字」や株式会社道明によるジャパンハウスにおける展示にみる紐結びや組紐を用いた「日本らしさ」の提示は、史実に依拠して紐結びや組紐に日本らしさを見出すことが難しいことから、エリック・ホブズボーム (Eric HOBBSAWM) がいう「創られた伝統」の一種であるといえよう。

参考文献

- 1 大橋康二「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津」『特別企画展 将軍家献上の鍋島・平戸・唐津-精巧なるやさきもの-』（佐賀県立九州陶磁文化館，2012），pp.177-178.
鍋島家は、16世紀後半から1868年まで佐賀藩（肥前藩）の大名家であり、藩の財政基盤を支える収入源の一つとして鍋島焼の生産および販売を位置付けていたと考えられている（Rousmaniere, Nicole Coolidge, *Vessels of influence : China and the birth of porcelain in medieval and early modern Japan*, (London: Bristol Classical Press; 2012) pp.38-41）。
- 2 大橋康二前掲書，p.188.
- 3 澤田和人「婚礼衣装」『歴史系総合誌「歴博」』第183号，（国立歴史民俗博物館，2014年3月20日発行），pp.20-23.
- 4 葛飾北斎『新形小紋帳』（文政7：1824）大英博物館所蔵，<https://www.britishmuseum.org/collection/image/873851001>（2024年1月10日閲覧）。
- 5 河原崎晃洞『結び模様 上、下』（芸艸堂，昭和8；1933）
河原崎晃洞編『結び雛形』（芸艸堂，昭和16；1941）
- 6 額田巖『結び』（法政大学出版局，1972），p.19.
額田巖『結びの文化：日本人の知恵と心』（東洋経済新報社，1983），p.ii.
- 7 『ブリタニカ国際大百科事典 5 小項目事典』（ブリタニカジャパン株式会社，1988），p.168.
井上雅人『洋服と日本人：国民服というモード』（広済堂出版，2001），pp.48-50.
国民服は1940年に成人男性に導入されたが、その普及の意図には軍事目的もあったため、普及に時間を要したことを鑑みれば、国民服儀礼章の普及もそれに準じるものだったと思われる（井上雅人前掲書，pp.43-49）。
『国民服（男子用）の手引』（被服協会，1940），pp.23-24.

「八紘一字」とは、1940年に生まれた言葉ではなく、元来、日蓮主義者として知られる田中智学により、1903年に日本的な世界統一の原理として『日本書紀』神武紀の一節に基づき、「天に答へ正を養ひ、然る後ち六合を兼ねて都を開き、八紘を掩いて宇と為さん」として「実行率先主義」として生まれた造語である（大谷栄一『日蓮主義とはなんだったのか 近代日本の思想水脈』（講談社，2019），p.157, p.160）。

- 8 株式会社道明 <https://domyo.co.jp/information/> (2024年1月10日閲覧)。
- 9 Trentmann, Frank, “Materiality in the Future of History: Things, Practices, and Politics” in *Journal of British Studies*, Apr., 2009, Vol. 48, No.2, Special Issue on Material Culture, (Cambridge University Press; 2009), pp.283-307 (283-285).
- 10 人文地理学等の分野で多くの研究者がマテリアリティという語を用いるものの、同語の使用に関する明確な定義は存在していないことは研究者らによっても指摘されてきたことであるが、その議論に与することは本研究の射程から外れるため、行わない（太田茂徳「＜マテリアリティ＞という視点の諸相—『これは論文ではない』—」『空間・社会・地理思想』22号，（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科，2019），pp.45-62, Miller, Daniel, “Materiality: An introduction” in *Materiality*, ed.by Daniel Miller, (Duke University Press; 2005), pp.1-50）。
- 11 藤原覚一『図説日本の結び』（築地書館，1974）。
- 12 C. アダムス『結び目の数学 結び目理論への初等的入門』金信泰造訳，（丸善出版，2021），p.vi, p.5, p.159.
- 13 C. アダムス前掲書 p.vi
- 14 C. アダムス前掲書，p.29.
- 15 金信泰造「訳者まえがき」C. アダムス『結び目の数学 結び目理論への初等的入門』p.viii.
2016年には「トポロジカル相転移および物質のトポロジカル相の理論的発見」により、ノーベル物理学賞が3名のアメリカの研究者に授与され、結び目理論にも注目が集まった（川村光『2016年ノーベル物理学賞は、「トポロジカル相転移および物質のトポロジカル相の理論的発見」の業績により、David J. Thouless 教授（ワシントン大学、アメリカ合衆国）、F. Duncan M. Haldane 教授（プリンストン大学、アメリカ合衆国）、J. Michael Kosterlitz 教授（ブラウン大学、アメリカ合衆国）の3氏が受賞することに決定。（10/4，5分更新）』（一般社団法人日本物理学会，2016年10月6日），<https://www.jps.or.jp/information/2016/10/2016david-j-thoulessf-duncan-m-haldanej-michael-kosterlitz3.php> (2023年10月8日閲覧)）。
- 16 津城寛文『折口信夫の鎮魂論：研究史的位相と歌人の身体感覚』（春秋社，1990），p.103.
- 17 小川直之「『むすび』の精神史：折口信夫の『むすび』論」『折形デザイン研究所の新・包結図説』（折形デザイン研究所，2009），pp.35-64 (pp.36-41)。
- 18 津城寛文前掲書，pp.5-10，p.23.
- 19 津城寛文前掲書，p.48.
折口信夫「日本文学の発生」『折口信夫全集』第7巻，（中央公論社，1955），p.109.
- 20 高崎正秀『古典と民俗学（上）』（講談社学術文庫，1978），pp.238-239.

- 『古典と民俗学（上）』（1978）は、『古典と民俗学』（塙書房，1959）に加筆、刊行されたものである。
- 21 高崎正秀前掲書，pp.236-237.
 - 22 渡邊一弘「千人針研究に向けての整理」『昭和のくらし研究』（6）昭和館編，（昭和館，2008），pp.53-71（pp.53-55）.
 - 23 加藤良治「奇なる呪物＜千人針＞」『歴史民俗学』7号，（批判社，1997），p.248.
 - 24 額田巖『ひも：ものと人間の文化史57』（法政大学出版，1986），p.6.
 額田巖前掲書（1972），pp.192-194.
 額田巖前掲書（1983），pp.19-24.
 - 25 額田巖前掲書（1983），pp.22-24.
 - 26 額田巖前掲書（1983），pp.24-25，pp.115-116.
 くしゃみと魂に関連した呪術は、すでに江戸時代に、産屋にてくしゃみをすることは魂が出るので不吉であるとし、魂を結び留めるために結びを用いる呪術が行われていたことが史料に記されている（陶智子『「女礼十冊書弁解」全注』和泉書院（1998），pp.242-243）。
 - 27 山口剛史「國學館大学附属図書館蔵『鎮魂祭次第』一解説と翻刻」『神道史研究』第59巻第1号，神道史学会（2011），pp.46-71（p.47）.
 小松馨「伯家神道」『国史大辞典』第11巻，吉川弘文館（1990），pp.617-618.
 - 28 『神道大系 論説編 11 伯家神道』神道大系編集会編，（神道大系編集会，1989），pp.299-313.
 - 29 山口剛史「國學館大学附属図書館蔵『鎮魂祭次第』一解説と翻刻」『神道史研究』第59巻第1号，（神道史学会，2011），pp.46-71（p.65）.
 - 30 源信の著した『往生要集』に収まる「臨終の行儀」では、臨終に際した病者の左手の中に五綵の幡を繫ぐという記載がある（源信『往生要集 全現代語訳』川崎康之，秋山虔，土田直鎮訳，（講談社学術文庫，2018），p.527）。
 今昔物語集 卷第十五の第十二に臨終に際して、「沐浴して淨き衣を着て、比叡山のお堂に入り、阿弥陀仏の手に五色の糸をつけてそれを引いて、西に向かつて念仏を唱える」という臨終行儀についての記載がある（『今昔物語集四』新日本古典文学体系35，（岩波書店，1993），p.393）。同様に、卷第二十の第二十三にも臨終に際して五色の糸で阿弥陀仏と往生者を繫いだという旨の記載が見られる（『今昔物語集四』新日本古典文学体系36，（岩波書店，1994），p.273）。
 - 31 寺本婉雅「蔵漢和三訳対校仏説無量寿経 仏説阿弥陀経」（丙午出版，1928），pp.95.
 - 32 佐藤眞人「神仏習合の諸様相」『東洋学術研究 通号 124』（東洋哲学研究所，1990），pp.111-121（p.118）.
 - 33 額田巖前掲書（1986），p.176.
 - 34 額田巖前掲書（1986），p.226.
 - 35 木下雅子『日本組紐古技法の研究』（京都書院，1994）.
 大谷章夫，多田牧子『組紐ジグザグのマジック = Kumihimo--the zigzag magic of Japanese braided cord』（LIXIL 出版，2020）.

- 組紐・組物学会, <http://kumihimo-society.org/index.html> (2023年10月13日)
- 36 木下雅子前掲書, p.3.
- 37 多田牧子「歴史解説 日本は紐の文化」『組紐ジグザグのマジック = Kumihimo--the zigzag magic of Japanese braided cord』(LIXIL 出版, 2020), pp.12-13.
- 38 額田巖『ひも：ものと人間の文化史57』(法政大学出版, 1986), pp.59-64.
多田牧子前掲書, p.12.
- 39 鯉本眞友美「縄文時代の低湿地遺跡―鳥浜貝塚が教えてくれること―」『さらにわかった！縄文人の植物利用』工藤雄一郎, 国立歴史民族博物館編, (新泉社, 2017), pp.30-34.
- 40 鯉本眞友美前掲書, p.44.
若狭湾歴史博物館, 展示紹介『鳥浜貝塚発見60周年記念特別展 森と出会った縄文人人と植物の歴史の始まり』, <https://wakahaku.pref.fukui.lg.jp/exhibition/detail/post-539.php> (2023年5月13日閲覧).
- 41 Semper, Gottfried “Style in the technical and tectonic arts or practical aesthetics (1860)”, pp. 215–219, in *The Four Elements of Architecture and Other Writings*, trans. H.F. Mallgrave and W. Herrmann (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), pp.181-263.
ティム・インゴルド『ラインズ：線の文化史』工藤晋, 管, 啓次郎訳, (左右社, 2014), p.78.
- 42 寺島良安『和漢三才図会』巻第18-19 (刊行年不明), 早稲田大学図書館古典籍総合データベース, https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31_e0860/bunko31_e0860_0017/bunko31_e0860_0017.html, (2024年1月11日閲覧).
- 43 寺島良安『和漢三才図会4 東洋文庫458』(平凡社, 1986) p.263.
- 44 伊勢貞丈『貞丈雑記4 東洋文庫453』(平凡社, 1986) p.208.
伊勢貞丈『貞丈雑記』文溪堂 (弘化3 ; 1846), 早稲田大学図書館古典籍総合データベース,
https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/wa03/wa03_06592/wa03_06592_0031/wa03_06592_0031.html, (2024年1月11日閲覧).
- 45 柏木博『「しきり」の文化論 講談社現代新書1719』(講談社, 2004), pp.90-95.
Herbert, Jean, *Shintō; at the fountain-head of Japan* (London: Allen & Unwin, 1967), p.115.
- 46 Nitschke, Gunter, *Japanese gardens : right angle and natural form*, p.18.
- 47 Ingold, Tim, *The Perception of the Environment: Essays on livelihood, dwelling and skill* (London: Routledge, 2011), pp.342-346.
- 48 Ingold, Tim *Making: anthropology, archaeology, art and architecture* (London: Routledge 2010), pp.112-113, pp.117-118.
- 49 額田巖前掲書 (1972), p.200.
- 50 「結びの意匠」『なごみ』204号 (12) (淡交社, 1996), pp.18-19.
- 51 岡本太郎『日本の伝統』(光文社, 1956).
- 52 東京の株式会社道明では、映画放映後、フランスやイギリスからの訪日客が組紐でできた商品を求めることが増えたという (2023年4月29日に株式会社道明の運営する

「有職組紐道明神楽坂」にて筆者が同社の社員にインタビューした内容に基づく）。

- 図 1 : 「色絵組紐文皿」(1690-1720 年代) 大阪市立東洋陶磁美術館所蔵, CC BY, 写真 : 川茂
- 図 2 : 「染付組紐文三つ亀甲形向付」大英博物館所蔵, CC BY-NC-SA 4.0,
https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1959-0418-18 (2024 年 1 月 10 日閲覧)。
- 図 3 : 「色絵葡萄栗鼠文瓢形水注」東京国立博物館所蔵,
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0048209> (2024 年 1 月 10 日閲覧)。
- 図 4 : 「色絵結文香合」野々村仁清 (江戸時代 : 17 世紀)、大阪市立東洋陶磁美術館所蔵、
 写真 : 六田知弘
- 図 5 : 葛飾北斎『新形小紋帳』(1824) 大英博物館所蔵, CC BY-NC-SA 4.0,
<https://www.britishmuseum.org/collection/image/1613513115> (2024 年 1 月 10 日閲覧)。
- 図 6 : 「国民服儀礼章」筆者所蔵品, 筆者撮影。
- 図 7 : 「5 本組紐」三内丸山遺跡・縄文時遊館展示品, 筆者撮影。
- 図 8 : 「注連縄」寺島良安『和漢三才図会』巻第 18-19 (刊行年不明), 早稲田大学図書館所蔵
- 図 9 : 埴輪盛装の男子 (古墳時代、6 世紀) 群馬県太田市 四ツ塚古墳出土, 東京国立博物館所蔵, 国立文化財機構所蔵品統合検索システム
https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-34320?locale=ja (2024 年 1 月 10 日閲覧)。
- 図 10 : 小川一真「梵天立像／月光菩薩」(1888) 東京国立博物館研究情報アーカイブス
https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002070607HP_5351 (2024 年 1 月 10 日閲覧)。なお、画像の縁の削除を筆者が加工として行った。

付 記

本研究は JSPS 科研費 JP 21J10013 の助成を受けました。

矢島由佳 (大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士後期課程)

Sources of 'Japaneseness' in Decorative Knots: Revealing the Embedded Meanings in the Knots and the Braids

YAJIMA Yoshika

Iwao NUKATA, a Japanese scholar specializing in knots, describes Japan as a nation of knots”, with which Japanese people craft unique Japanese culture in combination with tea practice, and incense practice. Indeed, decorative knots have been used in such practices in Japan. However, knots also presented a Japanese nationalistic image towards both domestic and overseas audiences. Notably, such iconic Japanese image is often associated with the idea of unity, derived from the act of knotting, or binding physical threads together. The source of such an idea has been developed among Japanese folklorists, referring to the theory named *Chinkonron* on the relationship between spirits and knots in the context of Shintoism, proposed by Shinobu ORIKUCHI, a renowned Japanese folklorist.

Moreover, this study focuses on the perspective of materiality in analyzing knots along with the act of knotting in the context of material culture to unfold what makes decorative knots represent ‘Japaneseness’. I argue that the analysis of the materiality of knots can reveal how knots can present the nationalistic image of Japan, partially associated with the idea of the invented tradition of Eric Hobsbawm. Focusing on the material of the knots, *kumihimo* (braids in English) have been employed, originated in the Chinese crafts, and brought to Japan with the arrival of Buddhism. In other words, it is difficult to find any uniqueness in Japanese decorative knots, considering cultural authenticity. However, such aspects of the materiality of objects have not been well considered in the research of knots among scholars of Japanese art and design.